



菅野・太田・長谷川 奨学会のご案内



菅野・太田・長谷川奨学会とは

菅野保次先生が、聖隷学園浜松衛生短期大学在職中、1,000万円を寄贈、これを基に1977年(昭和52年)に設立されました。その願いは、将来、保健医療及び社会福祉の分野で活躍しうる優秀な人材を育成することです。今日までに、聖隷クリストファー看護大学・聖隷学園浜松衛生短期大学学生をはじめ、聖隷介護福祉専門学校・聖隷学園高等学校生徒の学資援助に役立っています。

そして1990年(平成2年)、太田八重子先生も聖隷学園浜松衛生短期大学在職中、1,000万円を寄贈され、名前を菅野・太田奨学会と名付けました。

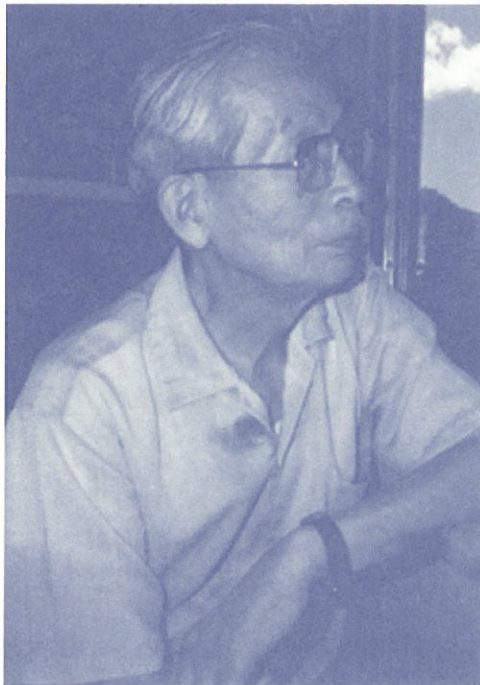
更に、長谷川 保学園長(1994年4月29日召天)と、八重子夫人(1995年2月15日召天)は教人のクリスチャン仲間と共に、無一物、徒手空拳で、当時(戦前・戦中)の医療で治らない結核患者を救済することに全力を傾注しました。その社会事業は、福祉、医療及び本学園創立という教育事業にも広がり、創立当初より聖書に示す「隣人愛」を建学の精神としました。そして、その精神を基にした保健医療及び社会福祉の分野に貢献する人材の為に召天後に1,000万円を寄贈され、新たに名前を菅野・太田・長谷川奨学会と名付けました。

菅野保次先生と 聖隷学園

「真っ赤に染まっていく浜松市郊外三方原の夕空。昭和5年ここに設けられた聖隷福祉事業団の仕事に加わるため、私は車を走らせていた。1973年(昭和48年)3月。あすは74歳、その日から始まる新しい人生、この夕映えのように美しく、よい仕事を、との願いをこめて……」と。最晩年、ふたたび北海道に帰られた菅野先生は、その日のことをこう回想された。

先生は1899年(明治32年)、宮城県の農家の長男として生を受けられた。貧しさゆえに中学(現高校)に入学できず、高等小学校(6年の義務教育卒業後の2年制小学校)に入学。1916年(大正5年)17歳、卒業と同時に母校小学校長の計らいで代用教員(無資格、能力に応じ与えられる臨時教員)に採用される。「小さな田舎の小学校で、生徒達が帰ったあと教室の片隅で不器用にオルガンを弾きながら、一高寮歌を歌い、裏山のセミの声を聞きながら、中学校講義録を読みふける哀れな少年教師であった」と語られた。独学で中学3年の編入試験に合格、4年修了とともに北海道大学予科に入学する。医学部を選んだのは医師に使命感を感じてというより生活苦の中で自分を育ててくれた両親を楽にさせたいとの願いにすぎなかったという。

1927年(昭和2年)28歳、北大卒業、旭川日赤病院に就職、此处で聖書を知った。そして「なんじら宝を地に積むな」ということばをきいた。両親を楽にさせたいために金を得る、いわば宝を地に積む、ことだけを求めてきた。先生は、「この時晴天のへきれきのように心に鳴り響いたこの聖句は、私の人生目標をひっくり返した」と語られた。同じ頃、先生の姉上が、女学校を卒業したばかりの長女を結核性脳膜炎のため失われた。この娘さんは誰も知らないうちにクリスチャンになっていた。十字架の墓標を背負って葬列に従いながら、「わたしはよみがえりです、命です。わたしを



信じるものは死んでも生きるのです」の聖書のことばを思い続けていた。そして1932年(昭和7年)33歳、先生は夫人とともに洗礼を受けてクリスチャンとなられた。医師となった時、内科医として、恩師の奨めもあって結核医を志した。当時結核は不治の病、亡国病とまで言われ、患者は家族にも、医師にさえ忌み嫌われていた。先生は一途にこの道を歩みつづけられた。「人がその友のために自分の生命を捨てること、これよりも大きな愛はない」「受けるよりは与えるほうが幸いである」先生はいつも心の中にこの聖言を秘めておられた。

1943年(昭和18年)帯広療養所に転任。戦争がいよいよ深みに落ちる中で、病院のベッドは少ないまま、軍隊で結核になった若者たちはそのまま郷里に帰される。結核はいや

が上にも広がる、まさに暗黒の時代であった。その中で中堅医師としての責任を負いつつ苦闘された。菅野先生は「この13年間は、仕事の上でも信仰の上でも、生涯での重要な時期であった」と述懐されている。

その後国立小樽病院長に転じ、退官の時を迎えられた。

その後札幌市内の有名な老人ホームに招かれて園長となられたが、職員の不正事件の責任をとって辞職された。この頃聖隷福祉事業団理事長 長谷川保に招かれ、その信仰と人格に惹かれて、北大同級、同信の親友福原謙蔵先生(大空の家園長在任中、志を残してがんのため逝去された。)と相たずさえて、三方原聖隷の地に足を踏み入れら

れたのである。

菅野先生は、十字の園老人ホームの医師として、短大教授として医学概論や内科学の講義を担当された。人手が足りなければ高校の講義や校医までして下さった。学問に対しては何処までも厳しく、人には老若を問わず、温かい愛情を惜しみなく注がれた。看護学生に接するなかで、ナイチンゲールについて関心を持たれ、その研究に取り組み、文献や資料をあさっておられた。「ナイチンゲールを学びたいければ聖隷に行け」と言われるようにしたいとよく言っておられた。

菅野先生は「宝を天に積む」ことに眼を開かれて以来、御自身の生活はきわめて質素に、余るものはすべて他に捧げられた。それはいかにも先生らしい自然さでなされた。

ある日、「1,000万ほどの金ですが、もう私どもが死ぬまでには使わなくても間に合いますので使ってください」とおっしゃった。そして、学生生徒の奨学金として先生の志を受けることになった。こうして1978年(昭和53年)1月に菅野奨学金として貸与が開始された。短大を了えて、さらに大学に学ぼうとする者、短大、看護学校に進みたい高校生、職業を変えて介護につこうとするもの、その他先生の志に沿って用いられ、今日まで57名がこれを受けている。大学卒業後聖隷短大を経て聖路加看護大学に進み、日本海外医療協力会(J.O.C.S.)から派遣されて、バンングラディッシュに留まり現地の保健衛生のために働いている川口恭子保健婦もこれを受けた。

この他にも学園のシンボルとして親しまれている“愛のレリーフ”高校一期生足立愛子の記念碑一建立についても、先生は「たいへん良いことです」といわれただけで、以来毎月の短大から受けられる講師料を袋のまま託して下さった。このレリーフは、多くの人のささやかな献金が増えられて500万円に達する見通しが立って、着手した。資金の大半は菅野先生によるものである。献金だけでなく、遺体は医学解剖のために浜松医大に献体を、そして遺骨は骨格模型にして聖隷短大にと約されていた。北海道御帰郷のためこれは彼地の大学に移された。そして代わりに新しい模型を聖隷短大生に買って下さった。

このように美しい三方原、聖隷のすべてを愛された先生であったが、奥様の御病弱のためお嬢様方のおられる北海道にふたび帰られた。先生御自身も、われわれも予測しないことであったが、先生のさわやかな決断に圧倒された。多くの人々の見送る朝、北大寮歌を高らかに歌って三方原を発たれた。

菅野先生は1989年(平成元年)晩秋、お嬢様に看とられて、静かに奥様の待つ天国に帰られた。

天の祈りに和して、菅野奨学金がいよいよ豊かに用いられることを祈りたい。



太田八重子先生 のこと

太田八重子先生は、東京女子医科大学に34年間勤められたあと、1980年(昭和55年)4月、聖隷学園浜松衛生短期大学の教授に就任され、同時に、外科医・顧問として聖隷浜松病院に籍を置かれその重責を果たしてこられました。その間東京女子医科大学の名誉教授の称号を受けられました。

先生は、看護教育に深い理解を示され、厳しい授業の一方、若々しい雰囲気の中にも、ユーモアのある精神で学生を導いてくださいました。このような中から、或る日「ほんのわずかな金額ですが、学生達のために何か役立てて下さい」と、その篤志を学園に託されました。これは、看護の勉強に打ち込む学生にアルバイトをさせなくてもすむように、そして、一人でも多く看護婦として巣立っていただきたい、という先生のお心遣いからでありました。

学園では、先生のこの温かな志を活かすものとして、菅野奨学会制度の資金に役立たせていただくことになり、以後は、菅野・太田奨学会と称して、より多くの学生・生徒を育むことになりました。

先生は、1993年(平成5年)3月に本学の教職を退かれ、学外から、豊かな志をもつ学生・生徒を見守って下さることになりました。この恵まれた土壌の中で充実した勉学を全うされるよう祈ります。

長谷川保学園長 御夫妻のこと

1. 学園長と奨学金

長谷川 保氏は聖隷学園の創設者である。そして、聖隷学園長として生涯をまっとうされた。死を前にして残した遺言は、学園で多くの青年達が看護を学び、働いている。将来そのなかからアフリカの人々のために奉仕活動に挺身するひとが出てくるように準備してほしい、であった。この志を記念し、2人の先達の名前を冠した奨学会に氏の名も加えて菅野・太田・長谷川奨学会とすることがふさわしいということになった。

長谷川 保氏は苦学生のつらさを身泌みて知っていた。1926年(大正15年)、貧困と病苦の二重苦に絶望する人々を助ける社会事業を行いたい、その資金を蓄えることを考えて、聖隷社クリーニング店を始めた。困難な仕事をやり抜くためには使命、信念のうえで特別な自覚、宗教的確信が不可欠であることに気づく。知己の仲介があって、1928年(昭和3年)、東京神学社神学校(現東京神学大学の前身)に学ぶために裸一貫の無一物で上京した。25歳で

あった。働きながら生活と学業とを両立させることのむずかしさはすぐやってきた。その年の7月6日の日記にこう書いた、「神経衰弱気味なり。苦学生の不可能をつくづく思う。特別に学資を呉れる人がなければ不可能だ。…人間の悲惨を思う。そのはかなさを思う…」と。学業は初めの志しに反して1年で断念する。復学を祈念して休学の手続きをして帰浜する。しかし、復学の時は再びこなかった。

同じ教会に同信として人生の意義を語り、信仰思想をめぐって論じあう友のひとり安川八重子氏がいた。向学心に燃える安川氏に同じ神学校で学ぶ道がひらかれた。安川氏の場合には、知己のとりなしによって生活と仕事の間がそなえられたので、学業だけではなく人間について、人生についてひろく深く思索し、若き年月を充実して過ごすことができた。安川氏は1929年(昭和4年)浜松をたつ。22歳であった。翌5年も勉学を心配なしに続けるのであるが、長谷川氏は自分の小遣いを割いて学資の足しにするようにと安川氏に送金した。これが氏の奨学金の心としてあらわれた最初である。

次に記すことはその最後と思われる場合である。Y氏は、奄美の名瀬市で国立療養所内でハンセン氏患者である父母の子として誕生した。姉弟2人である。法にしたがって父母から隔離され、カトリックの孤児施設に入れられ、修道女の手にと守られて育てられた。学令期に達すると、両親は療養所の塙の向こうにすることを



知るが会うことが許されないことも知る。姉弟はこうしてホスピタリズム(施設にいれられて育成したために生じる情緒障害、性格障害)の抑圧のなかで青年期苦しむ。Y氏は知能、学業の面で水準以上の実力をもつのに、対人関係では常に不安、恐怖感がつきまとい挫折感にさいなまれ、遅れをとり続けた。生い立ちにもとづいて看護師になるのが自分の生きる道と自覚した。1984年(昭和59年)4月、聖隷学園浜松衛生短期大学(3年

制)に入学する。22歳であった。知識と理論の学習は楽しく充実感をもって終始するが、実習の場に臨むと対人恐怖が起り、挫折感を克服できなくなった。5年をかけ1989年(平成元年)3月、卒業する。2年生の終り、3月を迎えたとき、患者との対応に自信を全く喪失している自分を見つめ、3年生になる望みも消え、退学を決意し、トラック運転手となり対人関係のない孤独の世界に生きることを考えた。3年生の学業を続けるための校納金はすでに手元になく、学資を探し求める意欲そのものを失っていた。このことを知った某教師は、すでに第一線から退いていた学園長・長谷川 保氏のもとにY氏をともない、ことの経過と心情のすべてを吐露する機会をつくった。会談の結果、聖隷学園浜松衛生短期大学を卒業し、国家試験に合格するために目をつぶって自己と戦い抜く、必要な校納金の50万円を無償で貸すから、返済は将来、働いて余裕ができたときにすればよい、の2つが約束として決まった。こうして翌春、卒業できたが、Y氏のその後の年月は春季の国家試験の失敗に始まり、苦渋にみちた右往左往のみちをたどる。音信不通の4年が過ぎた。

1993年(平成5年)4月、Y氏からとりなしをした某教師のもとに「50万円できたので、長谷川先生に感謝し、返済のために浜松へ行きたいのです。」の電話があった。聞けば「名瀬市の県立病院で手術室で働いている。その間、地方公務員の資格試験に合格し、30歳になりました。」という。5月7日夕方、Y氏は恩賜の50万円を直接に手渡し、感謝のことばを述べるために長谷川 保先生の部屋を訪れた。これが氏の最後の奨学金の仕事になった。

2. 八重子夫人最後の手記

八重子夫人は1995年2月15日に召天した。1994年5月1日、保氏の葬儀の日に倒れ入院し、肺癌であることがわかり、ホスピスに入院することを決意し、その夜書いた手記がここにある。

“主の栄光のためにのみ一切を捧げ尽くさん”

64年という長かった日々も、省みれば昨日のように思はれる。長谷川 保と私の出会いは、日本キリスト浜松伝道所に於ける礼拝と聖書研究であった。ハキハキとした一年志願兵で軍服姿で礼拝を守っていた。礼拝が終ると、壁にもたれて両足を伸ばしてじっと天井を見つめている。数名の青年男女は、実に熱心そのもので男とか女とかいうこと

は忘れて、論じあって聖書の真理を追及しぬいた。

内村 鑑三先生とのお弟子さん、征矢野先生、柏井 園先生、植村 正久先生、高倉 徳太郎先生のものを次々と読み、ルター、カルビン、を読みふけた。

そして最後には「キリストのために働きぬいて、キリストのためにともに苦しむいて、最後のたれ死にすることをもって理想としよう。」

これが長谷川保の告白であり、誓言であった。彼は山でも川でも一足飛びをする野性の馬のように止まることを知らない青年であった。

2年程経った夏の日「いよいよ仕事を始める。クリーニング店、消費者組合運動、看護婦組合、保育園等にとりかかる。それについては自分は結婚している人間であるということをはっきりしておきたい。生活するのは10年後でもよいから、結婚式だけ済ましておきたい。あなたは私を助けてくれませんか。」

私は、彼の荒馬を生涯乗りこなせるのだろうか彼の理想を破壊するようなことになりはしないか恐れた。私の最も尊敬し信頼していた恩師小塩力先生に相談したところ、先生はじっとした表情で「実はあなた方2人で話がまとまらなかったら私が話そうと思っていたのです。」と言われる。

そこで私は自分の弱さを知りつつ、不安を持ちつつ、結婚に踏み切りました。主の栄光のためにのみ一切を捧げ尽くさんものと無一物、無所有を理想とした彼は、貧乏と困難の限りの中で仕事を前進しぬいた。よくもやったものだと思われる。日本の国の救いのために20年間、国会議員として社会保障制度をつくり、彼が病に倒れて退いて年金生活者となり、はじめて安らかな日々をいただいた。

キリスト様の御恩寵の中で善きたたかいをたたかい、走るべき行程を走り尽くし、信仰を守って天国に移住した。多くの同志の友人に助けられ、多くの義人に助けられ、彼は喜び勇んで天国に移住した。私もまた、限りない感謝の中で天をめざしている。

1994年7月25日
長谷川 八重子

奨学生応募要領

■ 応募資格

将来、国内外を問わず広く保健医療及び社会福祉の分野において社会に貢献する志を有する者。

■ 募集人員

若干名。

■ 奨学金の貸与額

当該年度の日本育英会奨学金月額に準ずる。

■ 採用

書類審査及び面接を行い、学校法人聖隷学園の常勤理事会にて決定する。

■ 返還

貸与期間が終了してから3ヶ月間据え置き、貸与を受けた期間の2倍の期間内に年賦、半年賦、月賦の方法で返還する。但し、無利子とする。

■ 今まで、奨学金の貸与を受けた奨学生と主な進路

	主な進路と近況
聖隷クリストファー看護大学	
聖隷学園浜松衛生短期大学	<ul style="list-style-type: none"> ● 総合病院で看護業務に従事 ● 特別養護老人ホームで看護業務に従事 ● 看護大学進学後、日本キリスト教海外医療協力会メンバーとしてバングラディッシュで母親学級の保健指導、結核予防、ヘルス・ボランティア育成指導に従事 ● 保健婦、助産婦学校へ進学 ● 看護大学へ進学
聖隷介護福祉専門学校	<ul style="list-style-type: none"> ● 特別養護老人ホーム介護業務に従事 ● 介護福祉業務に従事
聖隷学園高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ● 看護系大学、専門学校へ進学 ● 介護福祉専門学校へ進学 ● その他



学校法人

聖隷学園

〒433 静岡県浜松市三方原町3453番地
TEL. 053 (436) 5311(代)
FAX. 053 (437) 6782

お問い合わせ先

聖隷クリストファー看護大学事務部	TEL. 053 (439) 1400 FAX. 053 (439) 1406
聖隷学園浜松衛生短期大学事務部	TEL. 053 (436) 5312 FAX. 053 (436) 5341
聖隷介護福祉専門学校事務部	TEL. 053 (436) 5432 FAX. 053 (436) 1464
聖隷学園高等学校事務部	TEL. 053 (436) 5313 FAX. 053 (438) 5699

(1995. 6. 1000)